

感染対策のヒント

これまで鹿児島市保健所では、陽性者の疫学調査や陽性者が判明した施設等の調査を行ってきました。その中で得られた感染対策のヒントをまとめました。

各事業所の状況・社会全体の感染状況に合わせてご活用ください。



感染対策のヒントを、3つのテーマでご紹介

1. 施設調査やアンケート調査から学ぶ
2. 入院・入所施設から学ぶ
3. 疫学調査の事例に学ぶ

1. 施設調査やアンケート調査から学ぶ

- ①時間差利用で密回避
- ②歯ブラシの管理方法
- ③より安全でムラの少ない消毒法
- ④ごみ箱からの感染
- ⑤換気機能をチェック
- ⑥パーティションは十分な高さで

1. 施設調査やアンケート調査から学ぶ

① 時間差利用で密回避

- ・ 職場で密になりやすいのは、休憩室、更衣室、喫煙所
- ・ 集団生活では、お風呂、脱衣所、洗面所...等々

例) 昼食の休憩室

お昼12:00~

ガヤガヤ



ギチギチ



お昼11:30~



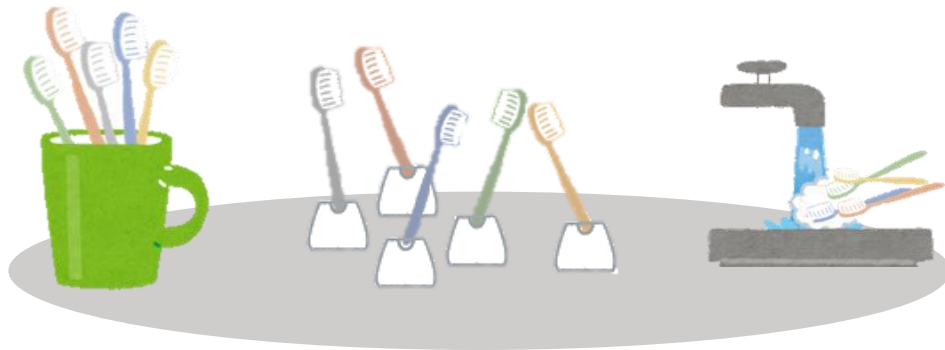
時間差を利用し、
密を回避しましょう！



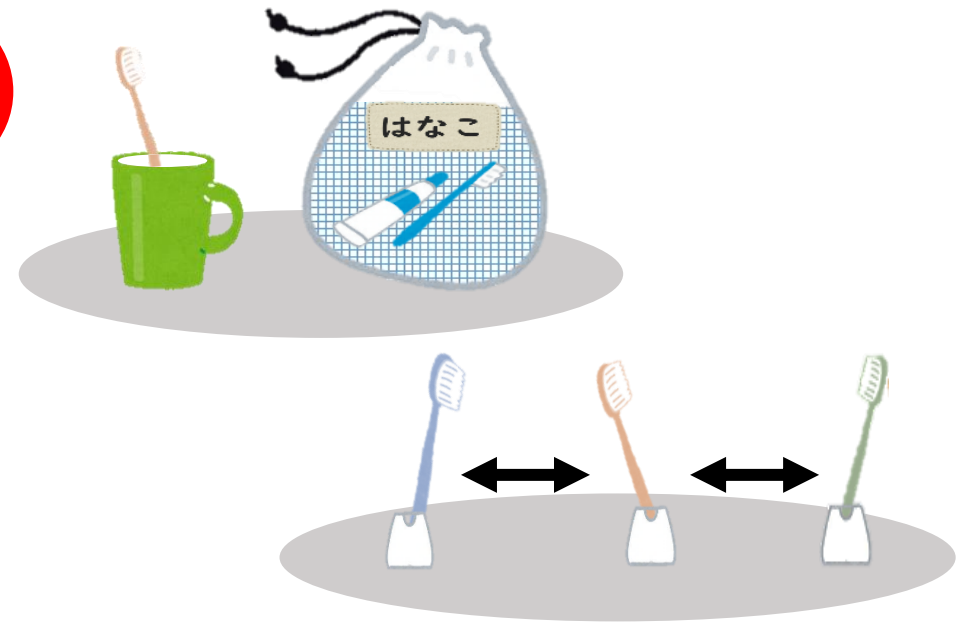
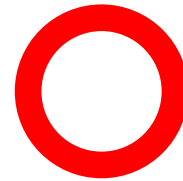
お昼12:30~



② 歯ブラシの管理方法



- ブラシ同士が接触してしまうと、感染の原因になることもある。
- 歯ブラシをまとめて一緒に洗うと、消毒・洗浄が不十分であれば、感染の原因になることもある。



- 個別で管理をする。
- 距離をしっかりとって管理する。

③より安全でムラの少ない消毒法

対象物への消毒液噴霧は、

- ①人が吸入してしまうリスクが高まる、②消毒のムラが生じやすい
- ③アルコールには引火性がある ④空間噴霧に有効性はない

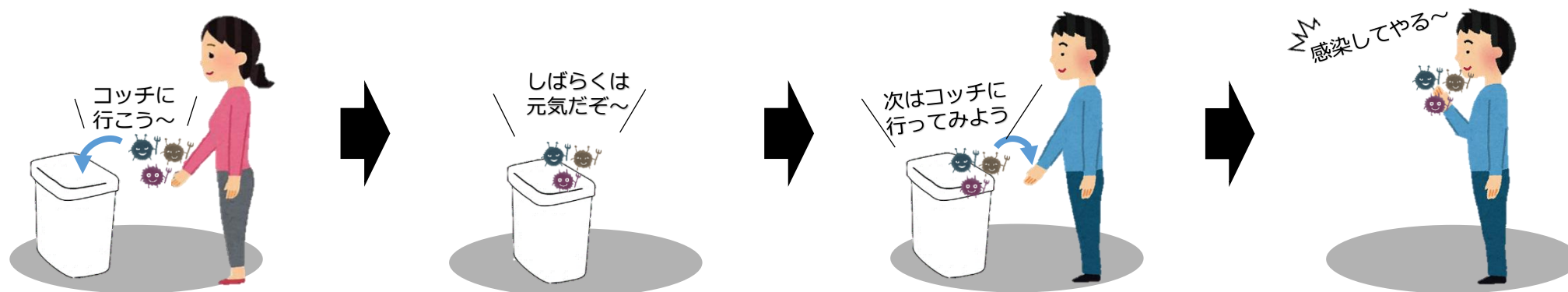
そのため、エタノール含有等の消毒クロスを用いて拭くことが望ましい。

また、スプレー型消毒薬を使用する場合は、紙などに近距離で噴霧して清拭消毒を行うことが望ましい。



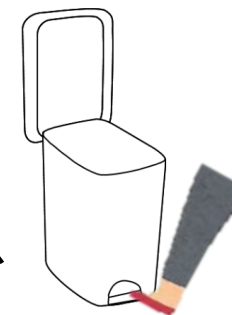
④ごみ箱からの感染

- ・物に付着したウイルスは時間の経過とともに死滅していくが、ウイルスが活着している間にそこに触れ、口や目を触ることで他者に感染が広がる。



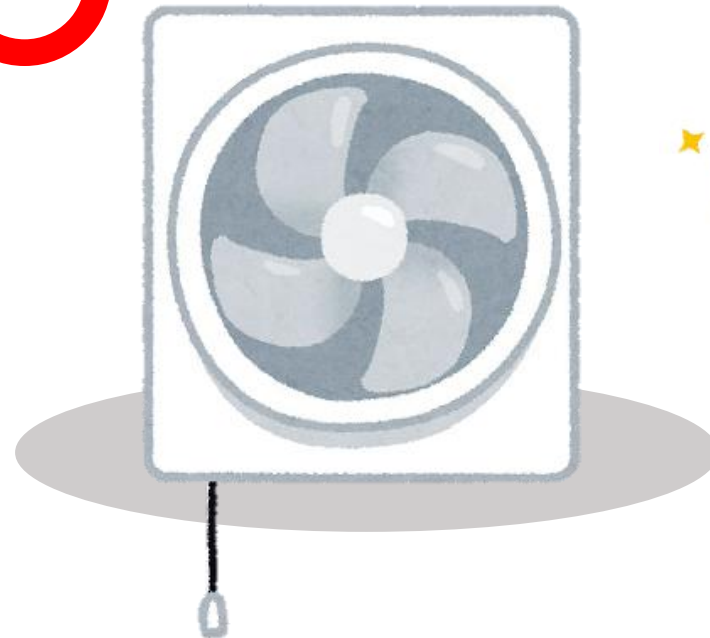
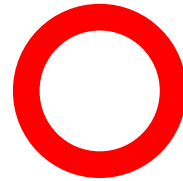
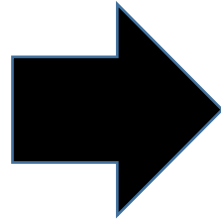
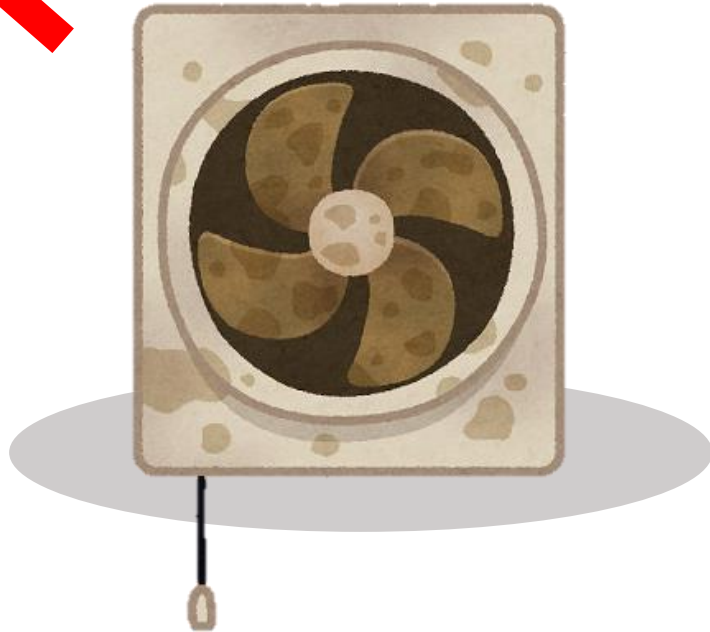
例えば、ごみ箱どうする??

- ・足踏み式のごみ箱を使う。
- ・ごみ箱を手で開けた後は手指消毒を行う。
- ・防護服着脱等、連続した作業の際は何度もごみ箱に触れて手で開けるより、一時的にふたを開けたままにするほうが望ましい。



⑤換気機能をチェック

換気扇にホコリ等がたまると換気機能が低下する。
定期的な換気扇の清掃が望ましい。

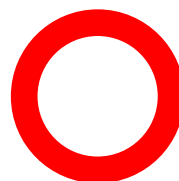


⑥パーティションは十分な高さで

- 十分な距離(1m以上)がない場所で、飛沫感染対策としてパーティションを活用する場合



顔を上げると頭や目が出てしまう高さ
→飛沫が侵入するリスクを軽減できない。



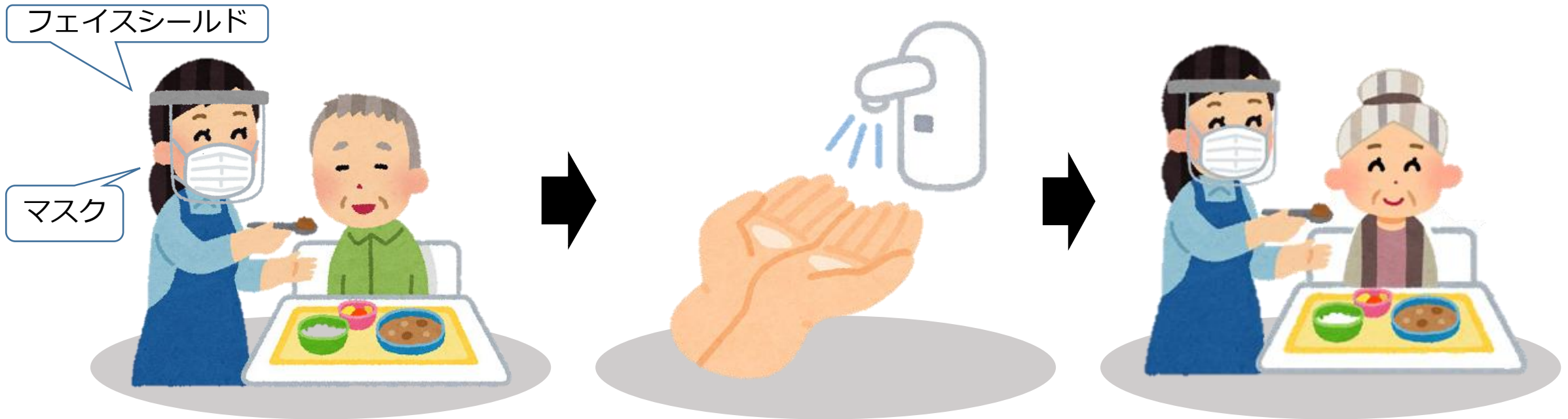
顔を上げてても、頭が隠れる十分な高さ
→飛沫が侵入するリスクを軽減できる。

2. 入院・入所施設から学ぶ

- ①食事介助や口腔ケアはここに注意
- ②こうしてました！みえるゾーニング

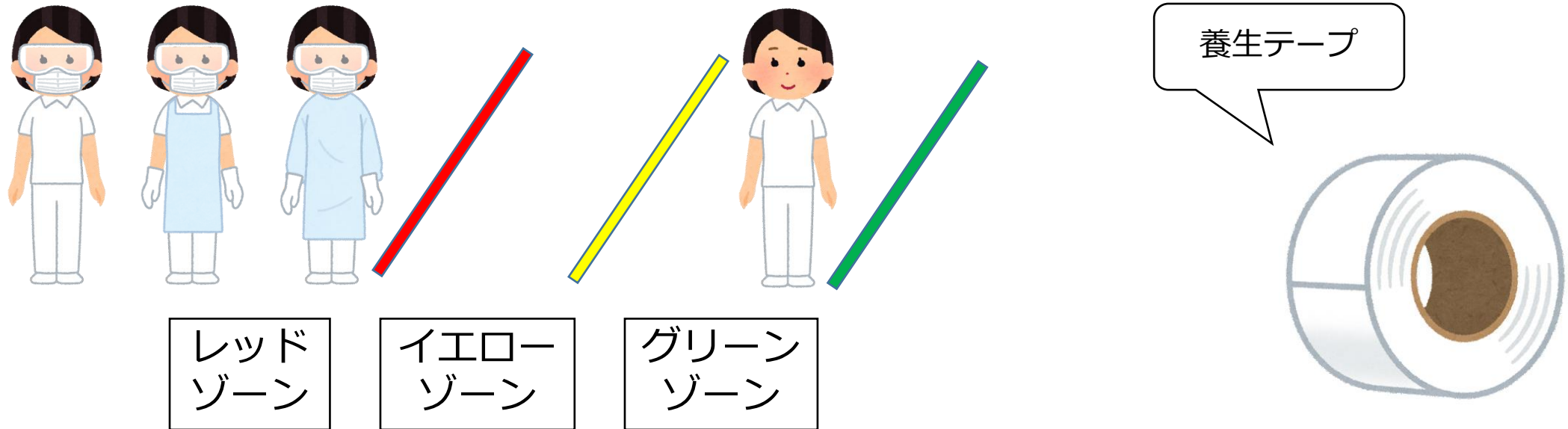
① 食事介助や口腔ケアはここに注意

- ・ 飛沫が飛散するリスクがあるため対面での介助は避け、マスクだけでなくフェイスシールドやゴーグル等で目の保護を行う。
- ・ 介助する対象者が変わるとに手指消毒を行う。



②こうしてました！みえる対策・ゾーニング

- ・陽性者が判明し、ゾーニングをする際は職員や利用者、誰もが分かるように工夫することが望ましい。
- ・床に養生テープを貼る、テーブルや椅子の配置を変えるなどで、陽性者ゾーンを視覚的・物理的に示す。
- ・防護具は陽性者とその周囲の環境への接触程度に応じて使い分けて、効率的・効果的な対策を



3. 疫学調査の事例に学ぶ

- ① 日々の記録に救われた
- ② 連携プレーで乗り切れた
- ③ こんな心構えで拡大防止

どんなに感染対策に努めていても、感染はいつ誰にでも起こる可能性があります。最初の陽性判明者が確認されてからの動き(初動対応)が、感染拡大防止に大変重要です。ここでは、多くの事業所・施設内感染の事例とともに、初動対応に役立つポイントを紹介します。職場の業務内容や感染のフェーズに合わせ、参考にしてください。

3. 疫学調査の事例に学ぶ

① 日々の記録に救われた（事例）

事例 職員の家族が発熱し陽性。

職員自身の症状はほとんどないが、濃厚接触者として検査したところ陽性が判明。健康管理表を確認すると、その職員は一昨日から喉の違和感を感じていた様子。そのため、発症の二日前からリスクの高い接触があった職員を中心に検査を実施した。

発熱等の明らかな症状がない場合、感染の発覚が遅くなることがある。しかし、この事例では、感染の発見が遅れた場合でも、日々の詳細な健康状態の記録やリスクの高い接触状況の記録により、感染リスクを考慮して迅速に対応ができた。

3. 疫学調査の事例に学ぶ

① 日々の記録に救われた（事例からの学び）

【職員の健康状態の記録は、体温だけでなく...】

- ・・・鼻水が少し出る、喉の違和感がある等軽微な症状も残しておく。
業務が忙しくなることや出先での業務があると、記録漏れが起きやすくなる。
リマインド機能を活用したり、場所に左右されず記録できるよう、アプリを活用し記録を残したりする等の工夫もある。

熱は36.6℃、
少し頭痛がある。
等々



【リスクの高い接触状況や座席図】

- ・・・食事介助のような感染リスクの高い接触の状況（接触時間、感染対策の状況等）や食事の座席、長時間の同乗車内の座席等の座席図の情報は、陽性判明時の感染拡大防止への対応に役立つ。そのため、日頃からある程度、接触する人や座席を固定したり、記録を残したりしておくことは望ましい。

座席や部屋の状況
は写真で残して
みようかな。



3. 疫学調査の事例に学ぶ

②連携プレーで乗り切れた（事例）

事例 施設の入所者の家族より、面会の翌日に発症し陽性が判明したと連絡がきた。受電した職員は、感染対策の統括担当にすぐ報告をした。統括担当を中心に、面会時の状況や入所者・職員の健康状態の情報を収集。統括担当が窓口となり、保健所に相談した。統括担当を中心に、施設の方針と保健所の助言をもとに対応を決定。今後の方針について施設職員全体に指示・情報共有。

- ・ 面会後の発症や陽性判明も連絡をするよう事前に家族に説明していたため、早期の感染報告に協力をもらった。
- ・ 職員が陽性判明時の対応を把握していたため、感染対策の統括にすぐに情報が集約された。
- ・ 外部との調整の窓口を一本化することで、情報の交錯がなく、感染のフェーズや事業所の現状にあった対応策を決定し、迅速に対応の指示が共有できた。

3. 疫学調査の事例に学ぶ

② 連携プレーで乗り切れた（事例からの学び）

【平常時から対応方針を決めていた】

- ・・・感染状況のフェーズや事業所の状況に合う対策・制限等を検討しておく。
陽性判明時に誰が統括し、調整や情報共有を行うか等、指揮系統を整えておく。
特に指揮系統の整理は情報の交錯を抑え、迅速な対応に繋がる。



統括担当

【平常時から対応方針を職員や関係者等に周知・共有していた】

- ・・・平常時から対応方針を理解しておくことで、具体的な行動が想像でき、職員や関係者が連携をとりやすくなる。
入所者のいる事業所等では、施設内での陽性判明の際の対応（外出や面会等の制限、検査の同意等）について平常時から本人や家族に説明し、了承を得ておくことでスムーズな対応に繋がる。

③ こんな心構えで拡大防止（事例1）

事例 昨日の会食で同席した友人の陽性が判明した。
感染の可能性があるため、本日お昼ごろに検査を受けた。
結果判明は翌日になると言われた。
症状もなかったため、同僚と車に乗り合わせ午後の外勤に同行した。
翌日、判明した検査結果は陽性。
外勤に同行した同僚もその後症状が出始め、検査したところ陽性が判明した。

感染の可能性があり検査を受けたにもかかわらず、結果判明を待たずに通常の行動をしてしまったことで、感染を広げてしまった可能性がある。無症状であっても、検査結果が出るまでは、人との接触は極力避けることが望ましい。

③ こんな心構えで拡大防止（事例2）

事例 高齢者施設の入所者で2名陽性が判明。

職員と入所者の全員検査を実施。結果は全員陰性であった。

陽性者と濃厚接触者は、個室で隔離し療養となった。

しかし、濃厚接触者以外の入所者にも症状のある方がいたため、

一定期間は入所者全員、個室での生活を基本とした。

また、職員・入所者の健康観察を強化した。

全員検査の翌日、陽性者との接触が少なかった入所者が発熱し、陽性となった。

個室対応をとっていたため、新たな濃厚接触はなく感染拡大防止に繋がった。

検査が陰性でも、有症状であったり、職場や同居者で陽性が出ていたりするときは、「もしかしたら今後、陽性に転じるかもしれない」と注意し、感染対策の強化や健康観察を注意深く行うことが望ましい。

③ こんな心構えで拡大防止（事例からの学び）

【検査結果判明までは動かない】

- ・・・感染の可能性があっても検査を実施したにもかかわらず、結果判明を待たずに通常通り行動してしまったり、ゾーニングのための移動をしてしまったりすると、接触者が増え感染を拡大させてしまう可能性がある。

【こんな時は結果にかかわらず、要対策！】

- ・・・検査のタイミングや検査キットの精度により、偽陰性（感染しているが、陰性反応が出ること）になることもあります。
検査が陰性でも、症状が続いているときや、職場・同居者に陽性が出ているときは、「もしかしたら今後、陽性に転じるかもしれない」と注意し、感染対策の強化や健康観察を注意深く行うことが望ましい。

検査は陰性だったけど喉が痛いな。
今日は仕事は休んで
自宅で療養しよう。

